

大学院修了にあたり

大学院修了にあたり

大学院4年 須田大亮



まだまだ先が長いと感じていた大学院生活も振り返ると短かった気がします。4年間で学び得たものが少なく、内容が薄かったから短く感じるのだろうかと考えましたが、まさか、

そんなはずはありません。大学院入学前までは経験したことがないことを沢山経験してきました。そんな入学前まで特殊だった事柄が4年を経てもはや普通になってしまったため短く感じるようになったのだと思います。

組織再建口腔外科学分野の大学院生は4年間の最初の1年で口腔外科の臨床を学び、あとの3年は研究中心の生活を送ります。もちろん1年間の臨床からも刺激を受けましたが、研究中心の生活はそれまでの私にとって未知の世界であったため、当時の私には非常に大きな刺激となりました。

特に刺激となったものの1つ目が基礎の研究です。実験の計画、器具の調達、実験動物の仕込み、解析、結果の分析・考察、そして論文の作成と、研究に必要な過程を一通り経験することができました。基礎の研究には知識の他に、失敗を含めた多くの経験、そして意外にも体力が必要であるということがわかりました。研究をして発表する側になることで、他人の研究から知識を得る際の効率も上がったように感じます。卒業後の学習や研究に大いに活かすことのできるスキルを身につけたのではないかと思います。

刺激となったものの2つ目が海外での研究発表

です。大学院入学前もまさか私が海外で研究発表をすることになるとは思ってもいませんでしたし、発表直前も本当に私なんかが発表してもよいのだろうかと心配になったことも有りましたが、先輩先生方の助けのおかげで無事海外での発表をこなすことができました。初めての国外発表であった韓国の学会の後も、インドネシア、イギリス、タイと多くの国で学会発表の機会を頂きました。未熟ではありますが、英語で考えを伝えることの他に学術的な英語表現、そして英語の聞き取りが上達したと思います。

刺激になったものの3つ目には多くの歯科医院で診療をさせて頂けたことが挙げられます。幸いなことに、医局に依頼のあった様々な歯科医院や医療機関で診療のお手伝いをさせて頂く事ができました。歯科医院ごとに特色があるため、それぞれに合わせて診療することが始めは大変でしたが、慣れた頃には多くの経験を得るチャンスとなりました。

この他にも多くの人と接する機会やイベントに参加する機会を得ることができた大学院生活は濃密で有用な時間であったと考えます。今後はこの経験を活かして臨床と研究に力を注いでゆきたいと思います。それがこの4年間でお世話になった人々への恩返しになるのではないかと考えています。



大学院修了にあたって

山田 友里恵

大学院に入学して4年。入学時は長い道のりのように感じていましたが、あっという間の4年間でした…といえるほど、さらりと過ぎ去った時間ではありませんでした。臨床・研究に毎日悪戦苦闘しつつ、本当に濃厚な大学院生活だったと思返しています。

1年目は臨床が中心の生活でした。学部生時代は、歯科麻酔は講義で理論を学ぶことが主だったので、正直入局するまで臨床の具体的なイメージをあまり持っていませんでした。まずは中央手術室での麻酔管理からスタートしたのですが、いざ始めて現場に出てみると、慣れない手術室で始めて経験する手技、機械操作ばかり。先生方が話す言葉の意味も理解できず、無能感に打ちひしがれて手も足も出ませんでした。しかし、指導医の先生から「しっかりしろ！先生は患者さんの命をあずかっているんだよ！」と激をとばされ、全身管理という歯科麻酔の仕事の責任の重さに身が引き締まり、安全に麻酔管理を行えるよう毎日必死で勉強しました。口腔外科や医科麻酔でも研修させていただきました。歯科麻酔の臨床では知り得なかったことをたくさん学ぶことができ、毎日が新しい発見と刺激に満ちていました。

2年生からは研究がスタートしました。瀬尾教授から「末梢神経再生過程におけるHedgehogシグナル伝達経路の役割の検討」というテーマをいただき、口腔解剖で研究のいろはを教えてくださいました。初めは実験動物のマウスを触るのも

ままならないほどで、ご指導くださった先生方には多大な労力とご迷惑をおかけいたしました。研究生生活は、振り返ってみると苦労や失敗の方が多かったです。しかし、へこんだ時は同じ口腔解剖の大学院生に励ましてもらったり、みんなで浴びるほど飲んで嫌な事は忘れて、なんとか挫けず今日までやってこられました。そんな中でも実験が上手くいったときや、予想もしなかった面白い結果に出会えた時は、鳥肌がたつような感動や興奮があり、気づけば研究に夢中になっていました。今までこれほどまでに何かに熱中したことはなかったのですが、研究との出会いは私にとって人生のターニングポイントだったと思います。3年を要してようやくひとつの仕事がまとまりそうですが、これが到達点ではありません。この大学院生活で培った研究の礎をもとに、歩みを止めず精進してまいりますので、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

大学院修了にあたり、これまでご指導くださいました歯科麻酔学、口腔解剖学の先生方に改めて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



大学院修了にあたり

顎顔面口腔外科学分野 渡部 桃子

顎顔面口腔外科学分野の渡部と申します。学部生、研修医、大学院生、と、気づけば故郷山形を離れ新潟に来て、11年目に突入しております。大学に入学した当初はこれほど長く新潟にお世話になるとは思っておりませんでした。過ぎ去ると本当にあっという間に感じられます。11年間の思い返しますと、特に大学院の4年間は濃厚な日々を過ごせたように思います。その大学院の日々を少し振り返ってみたいと思います。

学部を卒業後、歯科総合診療部に歯科研修医として在籍していた際に、ローテーションの口腔外科研修で顎顔面口腔外科にお世話になり、口腔外科に興味を持ちました。この分野をもう少し深く学んでみたいという気持ちから、顎顔面口腔外科学分野への大学院入学を決意しました。

1年目は、ひたすら臨床で、口腔外科外来、病棟、麻酔科研修をさせていただき、大学病院ならではの幅広い症例をたくさん勉強させていただきました。臨床に携わるなかで、口唇口蓋裂に興味を持ち、2年目からは口腔解剖学の大峽先生のもとで、遺伝子改変マウスを用いた口蓋裂の発生についての研究をさせていただきました。はじめはマウスに触るのに毎度毎度緊張していたのが、懐かしく感じられます。

口蓋裂はヒトのもっとも多い先天奇形のひとつで、その発症メカニズムの解明は非常に重要であると考えます。まだまだ不明の点は多くあります

が、その発症メカニズムの分子的解明に少しでも携わることができ、興味を持って研究に取り組むことができました。また、国内の学会だけでなく、国際学会へも参加させていただき、英語でのディスカッションに苦い思いもしましたが、大学院生らしい非常に貴重な経験をさせていただいたと感謝しております。

大学院生活は、研究、臨床、バイト、学生講義のお手伝いなど、目まぐるしい日々を過ごすこともありましたが、今思うと、何一つ無駄なことではなく、全てが自分の糧になっていることを実感しております。自分の興味のあるものに、腰を据えて4年間取り組める機会を得られたこと、尊敬する先生方、苦楽を共にしたもはや戦友とも呼べる院生仲間との出会いもあり、大学院に入学して良かったと思っております。大学院を修了し、今後は臨床のウェイトも大きくなると思いますが、以前とはまた違った視点を持って、臨床に従事できる気がいたします。

最後になりますが、ご指導いただきました多くの先生方に厚く御礼申し上げます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



平成28年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻博士課程修了者論文名

博士の専攻分野の名称	氏名（専攻）	博士論文名
博士（歯学）	西川 敦子 （口腔生命科学）	フィリピン国マングラウエ市における小児の公私立学校就学による齲蝕有病と成長発育、食習慣との相互関連
博士（歯学）	中島 努 （口腔生命科学）	Difference of tooth brushing motion between dental hygienists and mothers - Focusing on self-toothbrushing and caregivers' toothbrushing - (歯科衛生士と母親における歯磨き動作の比較 - セルフ磨きと仕上げ磨きについて -)
博士（歯学）	花崎 美華 （口腔生命科学）	Gender difference of tooth brushing motion and force on self-brushing and caregivers' brushing in dental professionals (歯科専門家におけるセルフブラッシングおよび介助磨き時のブラッシング動作・荷重の性差について)
博士（歯学）	大湊 麗 （口腔生命科学）	二段階口蓋形成手術法における硬口蓋閉鎖時期の検討 - 言語機能による分析 -
博士（歯学）	永井 孝宏 （口腔生命科学）	Eyelid development is controlled by mesenchymal microRNAs through regulating Wnt signaling (間葉のMicroRNAは、Wntシグナルを介して眼瞼の発生を制御する)
博士（歯学）	原 夕子 （口腔生命科学）	Hypoxic response of human oral mucosa fibroblasts in a 3D collagen lattice (コラーゲンゲル内で3次元培養したヒト口腔粘膜線維芽細胞の低酸素応答)
博士（歯学）	深井 真澄 （口腔生命科学）	口蓋裂患者における口蓋裂言語の心理的受容過程
博士（歯学）	渡部 桃子 （口腔生命科学）	Cleft Palate Caused by Ectopic Bone Formation in Mutation of Intraflagellar Transport Protein (IFT関連タンパク質変異による異所性の骨形成は口蓋裂を誘発する)
博士（歯学）	島田 惇史 （口腔生命科学）	Expression of anti - <i>Porphyromonas gingivalis</i> peptidylarginine deiminase immunoglobulin G and peptidylarginine deiminase-4 in patients with rheumatoid arthritis and periodontitis (関節リウマチおよび歯周炎罹患患者における <i>Porphyromonas gingivalis</i> peptidylarginine deiminaseに対する免疫グロブリンGとpeptidylarginine deiminase-4の発現)
博士（歯学）	根本 康子 （口腔生命科学）	Clinical and three-dimensional evaluation of combinational periodontal regenerative therapies using enamel matrix derivative and deproteinized bovine bone mineral with or without collagen membrane (エナメル基質タンパク及びウシ異種骨基質を用いたコンビネーション歯周組織再生療法におけるコラーゲン遮蔽膜の臨床的・3次元エックス線学的評価)
博士（歯学）	松田 由実 （口腔生命科学）	Ligature-induced periodontitis in mice induces elevated levels of circulating interleukin-6 but shows only weak effects on adipose and liver tissues (歯牙結紮によって誘導される歯周組織局所の炎症は血中インターロイキン-6レベルを上昇させる一方で肝臓および脂肪組織への影響は限定的である)
博士（歯学）	大森 裕子 （口腔生命科学）	日本人を対象とした矯正歯科治療前後の赤唇に関する形態学的研究 - 小臼歯抜去により治療したアンクルI級上下顎前突症例における矯正歯科治療前後の赤唇形態変化 -
博士（歯学）	上村 藍太郎 （口腔生命科学）	Inhibition of the degradation of 2-arachydonoylglycerol (2-AG) attenuated orofacial neuropathic pain following an injury to the trigeminal nerve in mice (口腔顔面領域の神経障害性疼痛に対する内因性カンナビノイドの鎮痛作用)
博士（歯学）	北見 公平 （口腔生命科学）	DNA repair via BRCA1 and BRCA2 is essential for craniofacial bone development (BRCA1 およびBRCA2 を介したDNA修復機能は頭蓋顔面骨の発生に重要である)

博士の専攻 分野の名称	氏名(専攻)	博士論文名
博士(歯学)	飯 泉 智 子 (口腔生命科学)	Effect of body posture on chewing behaviors in healthy volunteers (健常者において姿勢の違いがもたらす咀嚼運動の変化)
博士(歯学)	篠 原 千 鶴子 (口腔生命科学)	更年期女性における口腔乾燥感と関連する因子の検討
博士(歯学)	浅 井 佑 介 (口腔生命科学)	Changes of nasal and oronasopharyngeal airway morphologies and nasal respiratory function following orthognathic surgery (顎矯正手術後の鼻咽腔気道形態と鼻呼吸機能の変化)
博士(歯学)	須 田 大 亮 (口腔生命科学)	The effect of bone mass and architecture on rat mandibular condyle after mandibular distraction (下顎骨延長後のラット下顎頭に対する骨量と骨微細構造の影響)
博士(歯学)	須 田 有 紀子 (口腔生命科学)	拡散強調画像の多変量解析による下歯槽神経の分画
博士(歯学)	平 原 三 貴子 (口腔生命科学)	Novel trigeminal slice preparation method for studying mechanisms of nociception transmission (侵害刺激伝達メカニズムの解析に有用な新たな三叉神経スライス標本作製法の開発)
博士(歯学)	山 田 友 里 恵 (口腔生命科学)	Autocrine-mediated Shh Signaling Pathway Regulates Inferior Alveolar Nerve Regeneration via Controlling Schwann Cells (オートクラインによるソニックヘッジホッグシグナル経路はシュワン細胞の調節を介して下歯槽神経再生を制御する)
博士(学術)	木 村 秀 喜 (口腔生命科学)	現在歯数20以上の75歳高齢者は「健康な食事」を摂取しているか? (Do community-dwelling 75-year-old elderlies with 20 or more teeth take "a healthy dietary pattern"?)
博士(歯学)	笹 嶋 真 嵩 (口腔生命科学)	Effects of oral function training and oral health status on the physical performance of the potentially dependent elderly: A randomized controlled trial (特定高齢者の身体機能改善に対する口腔機能訓練の効果および口腔健康状態の影響)
博士(歯学)	長谷川 真 奈 (口腔生命科学)	Measurements of Pharyngeal Barometric Pressure During Swallowing in the Healthy Subjects (健常者における嚥下時の咽頭内気圧変化の測定)
博士(歯学)	八 田 あ ず さ (口腔生命科学)	Experimental dryness sensitizes cool cells to capsaicin-mediated inhibition via TRPV1 (実験的な乾燥はcool cellのcapsaicinによる応答抑制をTRPV1を介して感作させる)
博士(歯学)	BABKAIR Hamzah Ali O (口腔生命科学)	Aberrant Expression of the Tight Junction Molecules Claudin-1 and Zonula Occludens-1 Mediates Cell Growth and Invasion in Oral Squamous Cell Carcinoma (口腔扁平上皮癌におけるタイト結合分子Claudin-1およびZonula Occludens-1の異常発現はがん細胞の増殖と浸潤を亢進させる)
博士(歯学)	村 上 望 (口腔生命科学)	一食を通じての食事量および食事動作の観察
博士(歯学)	坂 上 雄 樹 (口腔生命科学)	Anti-biofilm and bactericidal effects of magnolia bark-derived magnolol and honokiol on <i>Streptococcus mutans</i> (<i>Streptococcus mutans</i> に対するMagnololおよびHonokiolの殺菌ならびに抗バイオフィルム効果)

平成28年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学専攻博士前期・博士後期課程修了者論文名

専攻分野の名称	氏名（専攻）	論文名
修士 (口腔保健福祉学)	小 粥 照 子 (口腔生命福祉学)	緩和ケアが行われたがん終末期患者の看護必要度からみた口腔衛生管理の介入時期の検討
修士 (口腔保健福祉学)	佐 藤 茜 (口腔生命福祉学)	Relationship between oral feeding and oral health condition in dysphagic patients (摂食嚥下障害患者における経口摂取と口腔環境の関係)
修士 (口腔保健福祉学)	佐 藤 夏 奈 (口腔生命福祉学)	施設入所高齢者の生活機能および食事形態と口腔機能、嚥下状態および全身状態との関係について
修士 (口腔保健福祉学)	保 田 麻 里 (口腔生命福祉学)	Relationship between physical, oral and swallowing function in frail elderly patients (フレイル患者における身体機能と口腔および嚥下機能との関係)
修士 (口腔保健福祉学)	小宮山 実 里 (口腔生命福祉学)	県立がんセンターにおける地域歯科診療所との連携による食道がん周術期口腔機能管理の状況と口腔衛生状態の改善効果の検討
博士 (口腔保健福祉学)	野 上 有 紀子 (口腔生命福祉学)	Dental caries prevalence and treatment level of neglected children at two child guidance centers (児童相談所における一時保護児童のう蝕およびう蝕処置状況に関する報告)
博士 (口腔保健福祉学)	岸 本 奈 月 (口腔生命福祉学)	介護保険施設における栄養管理、経口移行（維持）および口腔衛生管理に関する介護報酬の算定状況

